

故郷・山田町に迫った巨大津波と悲しい被害

— 地理学から見て —

サイエンス・ボランテニア 小岩清水

2011年3月11日の巨大津波は、故郷の皆さんの心を凍らせる、すさまじい姿で町の全てをのみ込みました。実際には津波そのものが及ばなかった山間の方々も、その方々にとって大切な人、心のぬくもりであった人々、働き動しんでいた仕事場に、ただならぬ激動がもたらされたに違いありません。

このような大災害は、私たちよりもはるかな昔にこの地域に生きた先祖の人々や、もつと遠くの時代に今の文明の基礎を創造してくれた原始の人々にも、多くの不幸を与えたと考えられます。現在、山田町で追跡できる最も古い事例は、およそ4500年も前のものでありますが、その時代の津波の痕跡は直接的には得られていません。しかし間接的な痕跡は、船越地区の第5地割や第6地割の高い場所に発見された縄文時代の住居跡（標高50〜60メートル付近）で、当時の人々の地中の食料庫に放棄された食物の残存物などから推測できると考えています。巨大津波

は縄文時代から故郷に押し寄せていたのです。

当時の人々の暮らしが、食物の多くを海に依存する傾向であったにも関わらず、なぜ海から離れた高い山の斜面に暮らし、毎日登り下りの苦心を続けたのかは、巨大な津波で多くの犠牲を出した悲劇を背景としたからだと考えると最も整合します。そして、そのような苦勞を伴ったと考えられる場所は、飯岡地区の大畑の上部の尾根斜面や、山田地区の関谷から沢田にかけての域にもあったと想定されますが、これらは津波との関わりとしては検証に手がつけられていないようです。船越と飯岡の大畑が発掘されたのは、三陸自動車道で「山田道路」と呼ばれている区間の造成のための文化財調査が実施されたからです。その記録や文化財資料は残されましたが、貴重な現場は道路建設によって保存できませんでした。

その他の例では、それよりも30メートルほど低い船越地区の国道45号線と、JR山田線（運休中）の間の通称「湾台」と呼ばれる位置に、集落があった時代などが想定できるのですが、その高さは2013年に発掘された大浦地区の畠中遺跡の22メートルの位置とも比較できそうです。畠中遺跡は4500年ほど前と考えられているようですから、湾台と同時期なのかもしれませんし、大浦小学校の基盤整備時にも注目に値する多くの遺物が出土したといわれています、ある程度の面的な規模があったのだと考えるべきでありましょう。

では、低い位置に人々の暮らしは存在していたのでしょうか。低い位置では間木戸（馬木戸、真木戸）の遺物散布地や、船越の低地の浦の浜で貝塚を伴っていたとされる新道遺跡が見つつか

ていますので、私たちの故郷山田町には海岸近くから10数〜20メートル程度、そして50メートルにもなる高い所まで、人々が暮らしていた時代が幻のように浮かび上がってきます。その自然的背景としては、縄文海進期（氷河期が終わり海水が増えてきた時代）と、もう一つは巨大津波の周期的作用が考えられます。海進は少なくとも1万年単位、巨大津波は400〜500年単位と考えられますが、問題は50メートルもの高さに営まれた集落痕跡の存在は、そこまで暮らしの場を高めなければ安心できない、超巨大津波に遭遇した時代があった可能性を考えておくことや、超巨大津波がどの程度の周期で発生するかを想定する科学の進歩に願いを込める必要があるということを示唆しています。

3・11津波の直後、「千年に一度の想定外の巨大津波」というニュースが日本列島に流布し、多くの方が記憶していますが、しばらくしてそのような言説は幽霊のように消えてしまいました。今回の津波の原因となった地震とは、マグニチュード9クラスで地球の地殻変動でもまれに見る巨大なものであり、幅200キロメートル、長さ600キロメートルの海底岩盤が動いたと判明しましたが、有史以前にはもつと短い間隔で巨大地震が発生していた可能性も捨て切れず、「千年に一度」だと断言できないためです。津波が今回を倍も上回る数値で発生すると想像するのは、とても普通の思考では難しいですが、頭のどこかにしっかりと記憶すべき教訓を、先祖たちは暮らしの遺跡として私たちに懸命に伝えていてのではないかと、私は考えています。

船越小学校で今回の巨大津波に直面し、一人の生徒も犠牲にせず、避難に成功した神業的な校務員・田代修三氏の家伝による津波防災の叡智もそれを見事に示しています。避難という最も消極的な方法を素朴に信じて、大きな地震があったら短時間のうちに高台に足を運ぶこと、そして目的地に着いて安心してしまおうのでなく、海に注目してその変化を観察すること。避難とは、次に何をするかを決めるための時間的余裕をつくる努力であり、海がさらに押し上がって来ていないかを見極め、その時間でなお不安を感じる場合はさらに高い場所へ走る努力をする。それは地震を感じてから直ちに避難した人のみ与えられたゆとりの存在であり、一段の安全性を確保できることだと考えましょう。

郷土・山田町域には多くの神社や寺院があります。そして、この神社と寺院の位置に注目すると、津波をまともに受け止めてしまうような低い場所にあるものと、3・11の巨大津波に対しても安全な位置に設けられているものとが、不思議な対比を示すことに気付かされます。先祖は、危険に対して古くから代々の経験を基に防災叡智を持ち、大切にしていました。「科学的知性の時代」といわれる現代ですが、古い時代よりも危険への対応力が劣化していることに気付きましょう。

科学的な思考のなかった時代の叡智とは、物事（自然現象）を極めて単純化して判断基準を設け、幼いころから口伝で教え込むことでした。危険対応が複雑で結論の出せない思考を省き、単純さの中に救いがあることを根幹に置きました。神社や寺院の配置と海からの高さは、安全かどうかの判断基準を示すための先祖の心配りだと考え、子供たちに大切に伝える努力をすべきだ

と、大人たちは意識してはいかがでしょうか。

しかし、教育制度が整い内容が高度に拡大するにつれて、多くの知識を複雑に組み合わせて、判断をより精緻なものにする努力を重ねることこそが科学であり、正しいことだと考えるようになりました。地殻変動に伴う最先端の科学を基に、正確で失敗しない避難を論理的にぎりぎりまで追求するのは、仕方がありません。それでも極めて短時間のうちの判断と予報、発信が伴わなければならぬ現象に対しては、一般の私たちがテレビやラジオ、携帯電話の緊急地震津波情報から、自分の身に関わる危険を瞬時に予知して避難行動に移す時間は相当のものになります。テレビを見ているよりも高台に駆け上がるの方が良いのは言うまでもありません。

私は、自然災害から身を守るには、瞬間的（反射的）に危険事態から遠ざかる判断をすることに尽きると信じています。地震が津波と結びつくか否かはともかく、海岸線に近い土地が生活域の人にとっては、地震が強かった場合だけでなく、弱い場合でも心構えとして、震動が収まったと同時に、避難の一步を踏み出すのが正しいと考えます。その避難の中で予報が正確さを欠いて津波の発生がないとしても、その姿勢しか自分を救うすべはないと思いつめて、行動規範を確立してほしいと願っています。私たちが現在位置付けている自然に関する知識は、観測などの記録がまだ150年程度しか蓄積されておらず、地球の45億年の推移を把握するには、余りにも資料が少ないと言えます。

それでも人間は、150年の蓄積から45億年という歴史を持つさまざまな対象をひるむことなく探り、それに挑み続けています。その素晴らしく煌煌と輝く意欲に、素晴らしいと憧れてやみません。

こいわ・しみず氏

昭和16年、岩手県山田町生まれ。山田小学校（当時）、山田中学校、山田高校に在学。専修大経済学部を卒業した後、同大付属高校で地理の教員を務めた。「中部以北山岳域の気候学的自然環境の研究」で日本気象学会学術奨励賞。雑誌「地理」でシリーズ「山岳地形を読む」を執筆したほか、学会誌などに数多くの論文を発表している。

「震災体験記」と心の復興

この文を綴るため、2011年の日記を見る。3・11の悪夢がよみがえる。停電や電波基地局の破壊、集中アクセスなどにより情報が全く得られず、何が起きたか知るまでに相当の日数を費やした。私の居住地に電気の来たのが9日目、水道の復旧は11日目である。

未曾有の震災を記録するため、「山田史談会」内に「山田町東日本大震災を記録する会」が創設されたのは2012年9月である。活動の基軸は「震災体験記」の収集だった。テレビやインターネット、写真集などで被災地の映像が大量に流されている中、町民の心の記録を後世に残そうと考えたのである。

聞き書きでなく、被災者自身が書いた「手記」にこだわったのには、湊雅義さん編著の聞き書きの既刊『それぞれの真実それぞれの思い―被災者が直接語る2011・3・11岩手県山田町の記録』を意識した面もあるが、そのみが理由ではない。

千年に一度の巨大地震と大津波。一瞬にして古里の町が廃虚となり、昨日までの「日常」が奪われた虚脱感、喪失感は深い。愛する家族、友人、知人を失った悲しみを抱えたままでは生きていけない。絶望、悔恨を乗り越えて生きるため力になるのが「書く」という行為なのではないか。人は精神の姿勢が能動的でなければ書けない。書こうと身構えたとき精神の緊張は大きくなり、内面に深く入って行くことができる。言葉を紡ぐことによって、あの日何があったのかを問い、因って来たる悲嘆が明らかになる。私たちはそう考えた。

しかし、手記収集は容易ではなかった。吉村昭『三陸海岸大津波』の「子供の眼」に倣い、子供の作文を残すべく、小学校から高校まで川端弘行会長と学校を訪問した。教師たちは心的外傷後ストレス障害を恐れ、消極的だった。

危惧には無理からぬ面もある。埼玉の友人が送ってきたある団体の機関紙に、山田町の同団体会員の震災体験が載っている。その会員の娘さんは震災当時小学生だった。津波の恐怖からか津波映像も写真も見られないという。大人でも、当時の状態が続いていて、津波の夢を見る。書けないと断られる例が多かった。むずかしい状況の中で、児童・生徒37編の体験記を収集できたのは意義深い。

当初、老若男女、幅広い年代層と男女の均衡を理想としたが、かなわなかった。高齢者、女性に偏り、企業、団体等の記録は今後の課題である。だが、109編の手記は町内の全地域にわたり、後世に語り継ぐに足る多様な内容を含む。

収集に当たった者の一人として感じたことを述べたい。大津波が町をどのように襲ったのか、

最もよく伝えるのは、田の浜住民の文である。石井正己著『柳田国男「遠野物語」』（NHKテキスト）によれば、明治29年の津波で田の浜は、138戸のうち129戸が流失。死者483人、生存者325人という甚大な被害に遭った。阿部優子さんの手記は、押し波、引き波の強大な破壊力を、佐々木サツさん、中村百合さんは、ものすごい速度について書いている。山田の本宿一夫さんにも同様の描写がある。

津波の速さはどれほどだったか。2011年4月25日の朝日新聞に、宮古市重茂の川代地区に襲来した津波の速度の記事がある。分析の基は、植物研究者大上幹彦さんが川代で撮影した70枚のデジタルカメラのデータだ。県立博物館の大石雅之学芸員の解析の結果、地震発生後23分から岸まで約25秒で到達していたことが分かった。速度はなんと時速115キロだった。

同年6月25日の朝日新聞には、大槌町の中心街が津波にのみ込まれるまでのドキュメントがある。自営業佐藤明広さんが、高台からビデオカメラで撮影した。地震発生2時46分。3時17分、沖合で津波が発生。21分に大槌川の堤防を越し、22分56秒に役場に到達。市街地全体がのみ込まれたのは24分52秒だった。地震から30分経過しても、役場周辺を中心街には多くの町民が残っていた。

真昼の高速津波は、逃げ遅れた人たちを目の前でのみ込んでいった。知人の顔、光景が目に焼き付き、思い出すと涙が出て眠られないと書いたのは下村房子さんだ。菊地みち子さんは、近所のおじさんの娘丁子が、目前で家と両親を流され、ただただ泣き叫んでいたと記している。哀切な話に言葉を失う。五十嵐浩子さんは、逃げる途中、知人のおばあさんに手をつかまれる。最初しっかりつかんでいたが、息子さんに支えられていたので手を離す。瞬間、おばあさんは波間に消える。手を離れた時の感触が頭から離れず、夜寝るのが恐いと言う。

人を助けられなかった悔恨が被災者の心をさいなむ。悲しい別れをした人が幽霊でもよいから会いたいと思うのは人情だ。2010年文芸評論家東雅夫氏が、『遠野物語』刊行100年を記念して、東北の怪談を集めようと「みちのく怪談コンテスト」を催した。震災年の2回目は、「震災怪談」が多数寄せられた。人々の記憶の中に、死者の思いが長く息づいていく。怪談が持つ大切な力だと東氏は語る。

震災は平穏な日常を一瞬にして破壊した。その喪失感を、高校生の阿部祥子さんは的確に表現している。自宅にいたとき、震災前の生活について考える。しかし、思い浮ばない。思い出せないほどに平和で、当たり前過ぎる日々だったんだと思うと切なくなると言う。家族がそろって健康でいて、変わったことも起こらず、日々同じことが繰り返されていく。その平凡さには折節の移り変わり同様なをいやす何かがある。大人になって阿部さんはそういうことに気づくはずだ。

子供たちの手記には、人のやさしさに触れた内容が多い。佐々木智輝君は、寒い避難所で毛布を他人に譲っている人を見て胸を打たれる。家族が心配なとき、おにぎりを作ってくれたお母さんたちの気持ちを忘れないと言う。福土優哉君も同じ趣旨のことを述べている。ものを豊かに

見、感じる心を持つ子供たちがいるかぎり町の将来は明るい。

手記には普遍的な肉親の情が随所に見られる。例えば、大浦の阿部秋子さんの手記は、息子を思う母の心にあふれ、感動的だ。町道が不通となり、山越えの道で3日間息子を待ち続けた阿部さんは、やっと避難所で会うことができた。息子の名を呼び、人目をはばからず泣き、叔母の家で息子と枕を並べて寝る。暗中、息子の布団のふくらみを見つつ眠りに入った。朝方、息子のザックの中の衣類をたたみ返しつつ幸せを感じたと記す。人の心の琴線に触れるくだりである。親であり、子であることの言うに言われる心のぬくもり、綾、襷が巧まずして表現され、余情となって深く心に残る。

町道開通後、息子を待った道を、阿部さんは意を決して歩く。当時を回顧し、涙が流れる。立ち尽くす目の先に穏やかな海が見える。その時、不意に、大いなる自然の中で生かされている、との思いが胸に満ちてきたと書いている。心の記録としての本書の意義がここに凝縮され、余韻が深い。

震災時、山田交番勤務だった3人の警察官の証言を掲載できたのはさいわいだった。吉田朋史さんは、避難誘導、救助活動を通して生と死がせめぎ合う場面に遭遇する。助けられなかった遺体への哀惜と悔恨の情深く、崇高な使命感に心を打たれる。

豊間根・荒川地区が、後方支援基地として果たした役割はすばらしかった。農村部で交通至便の地にあり、諸施設が整っている。加えて、荒川婦人防火クラブ、桜野地区ミセスクラブなどの



豊間根久子さん(豊間根地区在住)作の日本画「潮の香」(第8回国民文化祭いわて'93岩手県知事賞、佐渡市・日本アマチュア秀作美術館所蔵)。三陸海岸の美しく穏やかな海と浜辺の情景を描いている

組織がある。9名の体験記には炊き出しなどのようすが詳細に報告されている。人々の心の温かさ、手厚い支援に感銘を受ける。充実した支援を可能にしたのは、村落共同体的な人のつながりへの信頼であり、地域の底に流れている人の役に立ちたいという意識と他者へのいたわりだろう。

震災で町の風景は見る影も無く変貌した。壊滅した街以外で見ると、海岸林となぎさの喪失が町民の心に寂しい影を落とす。海の町として美しいなぎさが常にあり、未来へと続いていく姿は精神のよりどころとなる。なぎさは自然のリズムを最も微妙に感受できる場所である。満潮と干潮の反復、渡り鳥、潮の香り、海風、それらが一体と

なって自然のリズムを形成する。なぎさを通して私たちは海と触れ合う。個人的なことを言えば、少年の頃は小谷鳥海岸に遊び、サヨリが波に打ち上げられ、なぎさでもがいていた光景を今でも忘れられずにいる。

収集した手記は、被災した町民の数に比べればごく一部にすぎない。しかし、体験には共通するものが多いと思われる。互いに胸のうちを知る。悲しみを共有することが大切だろう。そして、自分がけっして孤独ではないことを感じ、希望を持って明日を生きる力にしていただければ、私たちの目的は達成されたといえる。

今も町内には行方不明のままの人が148人もいる。遺体の見つからない家族の死を受け入れられずに悩んでいる人々にとって、死者の思い出を書くことは慰霊と鎮魂になるのではないか。悲しみに耐えて手記を書いてくださった皆さんに感謝したい。一つ一つの話が、幅広い人たちの心に届き、長く記憶され、将来の防災を考える資料として役立つていくことを願う。

付記

「山田町東日本大震災を記録する会」は、2014年度5月から役場総務課と協同で取り組むこととなり、今日に至っている。総務課内の「震災記録誌」担当は佐藤孝雄氏である。この書において、手記の内容に合った適切な題が付けられ、地域ごとに地図・写真・被災概要を配し、字面にも気を配り、読みやすい紙面になったのは、元新聞社勤務のキャリアを有する氏の力に負うところが大きい。この本は官・民連携の成果でもあることを強調しておきたい。

体験手記には「震災を記録する会」が2度の公募等により集めたもののほか、他の出版物からの転載が多数含まれている。収録を了承してくださった「山田町婦人団体協議会」「田の浜婦人会」のほか関係団体に謝意を表す。

山田町東日本大震災を記録する会

●

会長 川端弘行
副会長 阿部武夫(故人)
事務局長 福士博
委員 後藤清郎／長岡豊

3・11 百九人の手記 岩手県山田町 東日本大震災の記録

平成27年3月1日発行

[編集]

岩手県山田町/山田町東日本大震災を記録する会

[発行]

岩手県山田町

〒028-1392 岩手県下閉伊郡山田町八幡町3-20

電話 0193-82-3111

FAX 0193-82-4989

<http://www.town.yamada.iwate.jp/>

[印刷・製本]

株式会社東海印刷所